

東大寺

今奈良市の東北部を占む、その寺域は西轟橋大路に至り、東手向山を籠め北般若野に至り南は春日社域に接す。本寺興立の初め大小の殿舎此間に布かれしも中世以降漸衰頹に就き、徳川氏の時寺棟三千三百石ありしが近年に及び益振はず、唯金仙の大像以下貴重の造功の猶遺存する者ありて世に推称せらる。聖武帝仏法興隆の至願を發したまひ諸国に国分寺を建てさせ給ひしが、天平十三年更に蘆舍那大仏の造像を志し、十五年近江紫香樂宮に御し造像の詔を頒ち玉ふ、廿一年平城京東山に大像を鑄、三年にして莊嚴成る、実に天平勝宝四年也。大日本仏教史云、大像鑄造の着手は天平十九年九月、(水鏡東鑑)而て其成就は三年の後なり、一代要記壘囊抄を按ずるに八回の改鑄あり、天平十三年より算すれば前後九年を経、落慶の歳までには実に十二年に及び、世に四聖建立の伽藍と云ふ、蓋本願聖武天皇開基良弁勸進行基導師菩提迦耶を菩薩権化の四聖と為す者也。(帝王編年記沙石集)東大寺は創立以降齊衡年中に至り仏頭の自ら墜ちて之を修理したる後、又二回の火災に會ふ、治承四年平氏の兵放火し大殿燬け仏頭壞れ、建久六年再興落慶あり後鳥羽天皇臨幸源賴朝監護す僧重源勸進僧榮西幹事たり、永祿十年松永久秀放火、仏像は幾もなく仮に修補したれど殿舎なかりしを、元祿五年金仏をも重ねて修補し尋いでその屋宇を構へぬ、現寺域六万坪華嚴宗の大本山也。

補【東大寺】○往時の寺域は西轟橋より東手向山を籠め北般若寺野より春日社興福寺の間に亘り、大小の堂宇其間に満ちたり、中世以降寺運衰へ徳川氏の世には田祿わづかに三千三百石ありしを、蘆遮那仏興造の縁起は朝野群載に曰ふ、東大寺大仏殿仏前板文、以天平十七歲次乙酉八月廿二日、於大倭国添上郡、奉創同像、天

皇專以御袖入土持運、加於御座、然後召集氏々人等、運土築堅御座、以天下十九年歲次丁亥九月廿九日、始奉鑄銘、以勝宝元年歲次己丑十月廿四日、奉鑄已畢、三箇年八箇度奉鑄御像、以天平勝宝四年歲次壬辰三月十四日、始奉塗金、未畢之間、以同年四月九日、儲於大会、奉開眼也、同日奉入大小灌頂廿六流、吳樂、胡樂、中樂、散樂、高麗樂、珍寶等、金銅蘆舍那仏像一軀、結跏趺坐、高五丈三尺五寸、面長一丈六尺、広九尺五寸、肉髻高三尺、眉長五尺四寸五分、目長三尺九寸、鼻長三尺二寸、口長三尺七寸、頤長一尺六寸、耳長八尺五寸、頸長二尺六寸五分、肩脛長二丈八尺七寸一分、胸長一丈八尺、腹長一丈三尺、臂長一丈九尺、自腋至腕長一丈五尺、掌長五尺六寸、中指長五尺、脛長二丈三尺八寸五分、膝前徑三丈九尺、膝厚七尺、足心一丈三尺、螺形九百六十六箇、高各一尺二寸、徑各三尺六寸、胴座高一丈、徑六丈八尺、上周廿一丈四尺、基周廿三丈九尺、石座高八尺、上周三十四丈七尺、基周卅九丈五尺、用熟銅七十三万九千五百六十斤、白鐵一万二千六百八十八斤、鍊金一万四百三十六兩、水銀五万八千六百二十兩、炭廿万六千三百五十六斛、日光一基、高十一丈四尺、広九丈六尺、挾侍菩薩像一軀、並塼光高各三丈、面長六尺広五尺、口長二尺一寸、耳長五尺九寸、眉長五尺九寸、目長二尺二寸、鼻下徑一尺八寸、云々、大仏師從四位下國土麻呂、大鑄師從五位下高市真國、從五位下高市真麻呂、從五位下楠本男玉、大工從五位下猪名部百世、從五位下益田繩手。

○金燈籠は天平年間の鑄造にして、建久の修補に係る。
〔付箋〕
法華堂 桁行五間、梁間八間、礼堂・中堂・本堂を連合し、屋根本瓦葺。
鐘樓 一間四方、單層入母屋、本瓦葺。

大仏殿

蘆舍那仏銅座像一軀、日光月光塑造着色立像二軀、不空絹索觀音乾漆立像一軀(良弁僧正作)四天王乾漆着色立像二軀(行基菩薩作)金剛密迹二力士乾漆着色立像二軀、石造獅子一雙(行基菩薩作)四天王塑造着色立像四軀(止利作)同成壇院。
東大寺の中堂也、中に金仏蘆舍那を置く、殿堂は再度の火に罹り寛永中旧規の寸尺を減縮して之を建つ、其金仏は当初の頭首燬壞し後人の補修に係る。朝野群載云、鑄師楠本男玉高市真國高市真鷹、大仏師國土鷹、鑄料熟銅七十三万九千五百六十斤、白鐵一万二千六百斤、鍊金一万四百卅兩、水銀五万八千六百兩、成像結跏趺坐高五丈三尺五寸、面長一丈六尺広九尺五寸、銅坐高一丈徑六丈八尺、石座高八尺基周卅九丈五尺、大仏殿、二重十一間、高二丈六尺、東西二十九丈、広十七尺基砌七尺、○東鑑云、建久六年東大寺供養、法皇(後白河)勅重源上人、去寿永二年令大宋國陳和卿、始奉鑄本仏御頭。坊目遺考云、永祿十年十月、松永三好戦争の兵火に罹りたるを、当国福住(山辺郡福住)住人山田道安富財を抛て仏を修補す、然に大殿焼失後仏体雨露に曝され給ひし事百十余年、龍松院公慶上人大殿再建の志願を發し、五代將軍綱吉公宝永元年再建あり。考古学会雜誌云、現存の大仏は其頭首元祿五年の鑄造にして、右手は寿永二年の鑄造なり、其他所々に修補を加へたれば、天平創造のまゝなる所は、胴体の大佛と、蓮座の花片十餘枚に過ぎず。元祿五年南都大仏供養記曰、仏御頭、永祿年中大殿焼失之時落、山田道安以銅板仮修之、今摹其面容、鑄之、鑄師沼津因幡國重、宮本兵庫正次、仏御身内、以洪材上下縦横支之、依像壞雨漏、材木悉朽、今新修之。

抑この金銅仏造立の當時を回顧するに、天平勝宝元年